

研究論文

近代期における高野山の変容と聖地管理

—観光開発の中での聖性保持の取り組み

Transformation of Koyasan in Wakayama and Management of religious sites: Maintaining sacredness in tourism development

明山 文代

Fumiyo Akiyama

和歌山大学国際観光学研究センター（CTR）客員一般研究員

キーワード：聖地、観光、変容、聖地管理

Key Words : sacred place, tourism, transformation, management of the sacredness

Abstract :

Koyasan has been a sacred place for prayer and training for followers of the Shingon sect (one of the Buddhist schools) since its inception. After the Meiji Restoration in the 1860s, however, Koyasan faced radical political, social, and economic changes and tourism promotion, all of which contributed to the transformation of this religious place to a commercial space. This study used Koyasan in modern times as a case to analyze ways to preserve the sanctity of a religious space under the force of commercialization through tourism promotion. The study looked into the activities of religious organizations, railway companies, visitors, local residents, and the government, based on the idea that a place could be constructed through conflicts and collaborations among different subjects with their various thoughts and intentions. The results of the research suggest that Koyasan was drastically restructured in the two periods following the 1860s. First, in the 1870s, Koyasan largely lost its economic foundation due to a series of land reforms by the Japanese government, and was changed socially due to a lift on a ban for outsiders to enter the sacred space of Koyasan. The second period is the Taisho and early Showa eras (1912-1930s). During this period, under the national boom of tourism, Koyasan became a popular tourist destination for its traditional religious rituals. The other factor of popularity of Koyasan as a tourist destination was the improvement of traffic access to this site by the construction of railways all over Japan and the development of a local transportation system from a collaboration between Nankai Electric Railway Company and Kongobuji—the main temple of Koyasan. This railway company further promoted tourism of Koyasan in order to increase passengers for its trains. In response to this progress in tourism, Kongobuji tried to maintain the solemnity and sacredness of the place by regulating land use through a land reclamation project. Due to this project, the construction of commercial accommodation facilities was restricted, and succeeded in preventing from commercializing the space of Koyasan to a certain level. Thus, the regulation of land use may be an important factor for Koyasan to maintain its landscape and sacredness as a religious place. This case may provide useful implications for those who search means to protect the sanctity of religious places from the pressure to commercialize them for tourism development.

I. はじめに

近年、宗教的聖地は世界的に注目され、訪問者も増加している。例えば、聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラでは、2013年の巡礼者は約216,000人で2003年の約3倍となり、10年間で約140,000人増加した¹⁾。とりわけ、現在ではパワースポットブームなどにより、聖地は私たちが自由に選べる観

光の対象のひとつとみなされる風潮にある²⁾。さらにはこのような変化の中で、宗教的聖地の多くは経済効果の創出の観点から観光振興やまちづくり等に活用されることが期待されている³⁾。一方で、観光地化によって宗教的聖地の聖性が失われることが問題視されるようになっている⁴⁾。しかし、聖地は、観光目的とする訪問者に開かれることによって、聖地としての意

義を失うことになるのだろうか。聖地の聖性の保持は不可能なのだろうか。また、聖地にとって、観光地化による利益はないのだろうか。こうした問いに対し、本稿では、明治後期から昭和初期にかけての高野山（和歌山県）を事例とした研究でその答を探求することとした。

高野山に焦点を当てた理由は、1200年に及ぶ歴史を持つ日本有数の宗教的聖地と認識されている一方で、近代に入り観光地化の中でその聖性の保持が困難にさらされてきた。高野山は、2004年にUNESCO（United Nations Educational Scientific and Cultural Organization）の世界遺産に登録され、宗教を目的としない訪問者が増加した⁵⁾。しかし、それ以前の1920～30年代頃には（大正から昭和初期にかけて）、宗教目的以外の訪問者に開かれ、制度の変化や観光振興の中で高野山が聖性の保持に努めたという経験がある。

そこで、本稿では、明治後期から昭和初期の高野山に焦点を当て、観光地化の中での聖性の保持がいかに行われたかを探ることにした。これは、現代、観光振興の中であらゆるものが商品化され、オーバーツーリズムなどの過度な開発が見受けられる今日の観光に関して、考慮すべき課題への示唆を持つと考え。本研究は、「宗教的聖地の観光開発が推進される中でその聖性の保持」という重要な課題に取り組むものであるとしたい。

この研究では、宗教的聖地の空間的变化に注目し、宗教地理学における聖地研究の分析視点をを用いることとする。この視点から、聖地の社会的な意味が社会的なコンテキストの変化に伴いどのように変容していくのか、そして、聖地の変容に対して宗教教団がいかに向き合うのかに焦点を当てながら上記の課題を探究したい。

以下、第Ⅱ章では、まず「聖地」の定義および新しい宗教地理学研究の分析視点について検討し、その影響を受けた日本国内の研究事例を紹介する。第Ⅲ章では、高野山の明治維新以降の再編過程を考察し、高野山において、観光地化が起こる社会的背景や要因を考察する。そして、金剛峯寺が山内の景観と森厳性保持のためにおこなった聖地管理の取り組みを明らかにする。第Ⅳ章では、高野山の聖地変容のメカニズムと聖地の管理について考察する。第Ⅴ章では、聖性の保持についてまとめる。なお、本研究の主なデータは、高野山大学図書館が所蔵する大正期から昭和初期に至る小冊子や観光案内、そして和歌山県立図書館が所蔵する大正期から昭和初期に至る大手新聞各社の記事や、高野町が編纂した高野町史である。

Ⅱ．研究の背景

1. 「聖地」の定義およびこれに関する先行研究

「聖地」については、宗教学、地理学、人類学等多方面から様々な研究が行われてきた。宗教学の分野では、聖地は人間に先立って存在するものであり、動かしがたい存在である

と解釈される一方で、社会的に生産され消費されるものという観点に立つ研究がある⁶⁾。現在では、特に後者の観点から、聖なる空間の創出や変容についての研究が注目され、「宗教とツーリズム」という新しい分野での研究も蓄積されている。人類学では、聖なる空間は「生かされる空間」でもあり、人々の営みによって重層化し変容すると考えられている。このような視点に基づき、聖なる空間を人々の経験や記憶の累積とし、祭祀等を通して考察するという研究がなされている⁷⁾。

地理学においても、宗教を対象とし聖地に焦点を当てた研究の蓄積がある。西洋キリスト教世界の地理学においては、19世紀までは、神は超越的存在であるという見方がなされていた。しかし、20世紀末に「新しい文化地理学」が注目されるようになり、研究視点も変化した。「新しい文化地理学」においては、文化は生産関係や民族、ジェンダーなどの社会関係の反映として捉えられ、特定の空間が社会集団によって形成される過程を分析する手法が広がっていった。このように空間形成を社会や文化との関連で分析するという視点は、地理学者による宗教に関する研究においても大きな影響を及ぼし、聖地や宗教施設と社会集団との関係が重視されるようになった。例えば、新しい文化地理学の興隆を受け、レヴィンは環境決定論者や観念論者らの研究に対し、宗教的な制度、宗教的景観場所、宗教的体験を社会関係から解き明かすべきであると主張した⁸⁾。また、コン（L.Kong）は1990年代にシンガポールの宗教に関する事例研究を相次いで発表し、空間形成の社会的条件としてはそれまで重視されなかった宗教をその重要な研究対象の一つとして位置づけようとした。そして、宗教空間をめぐる国家と教団や信者との立場の違いを「ヘゲモニー」と「交渉」、「適応」といった概念を用いて分析した⁹⁾。

地理学における宗教へのこうした新しいアプローチは、日本国内の宗教地理学の研究にも影響を及ぼし、1990年代以降、宗教と社会の相互作用を考察する研究が増えた。この中には、例えば森正人、藤村健一、松井圭介、森悟朗、對馬路人の研究がある。それぞれの研究は以下のとおりである。

森正人は四国八十八ヶ所の遍路の様相を考察し、それによって巡礼の空間が編成される際、仏教宗派や市民団体、行政などが関与する複雑な過程を明らかにした¹⁰⁾。藤村健一は、福井県嶺北地域における寺院や道場を事例として、宗教施設が形成され、逆に施設がそれをめぐる社会集団に影響を与える相互関係を分析した¹¹⁾。松井圭介は長崎キリシタンについての研究において、「聖地は社会経済的、政治的といった様々な目的を持った主体の思惑によって創造され新しい意味を付与され絶えずコンフリクトを繰り返している」と聖地を捉え、観光の現場では、ホスト、ゲスト、プロデューサーという三者の関係を考察することが重要としている¹²⁾。森悟朗は、江の島を事例として、近代の観光地化と江島神社をめぐる宗教との関係について考察を試みた¹³⁾。對馬は、関西における私

鉄路線を事例に、近代期、鉄道は聖地・霊場と人々を仲介するエージェントとしての役割を果たすという意味で、宗教コーディネーターと特徴づけられるとした¹⁴⁾。

これらの研究は聖地の形成やその変容を社会集団との関係から動態的に解明していくもので、聖地・聖性は所与のものとしてあるのではなく、宗教と社会の相互関連の中で、社会的な構築物として形成されるという分析視点が用いられている。しかし、聖地がその聖性を失って変容・衰退していく過程や新たな意味が付与されて聖地がより一層聖性を強めていく様態についての実践的な研究例は十分とは言えない。例えば、Shackleyによる観光客の増加に伴う聖地の管理・運営の問題を分析した研究はあるが、日本の地理学研究では些少であると指摘されている¹⁵⁾。

以上のような研究成果を踏まえて、高野山の聖性と観光の関係について、次のような視点から分析する。聖地は、所与のものとして人間の外部にあるのではなく、政治的、経済的、社会的といった多種多様な目的を持った社会集団との関係において社会的に構築され、新しい意味を付与されていく。聖地に対するこのような見方に基づき、本稿では、形成された新たな空間が、さまざまな目的を持った社会集団にどのような影響を与え、新たな相互関係を形成していくのかを考察する。特に、本稿では日本の聖地に大きな変容をよぎなくさせた近代期に絞って検討したい。

2. 調査対象地の概要

本事例として取り上げる高野山は、和歌山県の北東部・和歌山県伊都郡高野町に位置する「真言密教の聖地」である¹⁶⁾。この地には空海が創建した壇上伽藍を中心に多くの寺院が存在している。それらの寺院や集落は、標高約800mの高位平坦地に立地し、周囲は「内の八葉、外の八葉」と呼ばれる蓮華の花びらのような峰々に囲まれた地形であることから、この世の浄土であるという信仰が古くから伝えられてきた¹⁷⁾。「高野」という名は、空海が開創にあたって朝廷に提出したといわれる上表文に「平原幽地あり名付けて高野とす四面高嶺人從蹊を絶つ」¹⁸⁾とあり、空海が名付けたとされている。現在、高野山は西の壇上伽藍と東の奥之院を中心に、117の塔頭（うち52の寺院は宿坊を経営する）や商家、その他の集落からなる宗教都市の様相を呈している¹⁹⁾。

真言密教の聖地としての高野山の始まりは、9世紀頃である。空海は、816年、嵯峨天皇から修禪の道場として高野山を下賜され、弟子と共に高野山の開創に着手した。その後、江戸期に至る頃には、極楽浄土に救われる地として万人から信仰を集める「聖地」に位置づけられるようになる²⁰⁾。長らく一般の人々に対しては閉ざされてきたが、明治期に入って高野山に「観光」という新しい要素・動きが加わった。この時期の高野山についての研究は数少ないが、その一つに池田一城の研究がある。池田は、聖地高野山に注目し、交通の

発達に伴う聖地空間の再編を捉え高野山の観光地化を概観した²¹⁾。しかし、この研究においても、観光地化に伴う聖地の変容という問題について、聖地・聖性はいかに保持されるのか、いかに聖地を管理するのかについては言及されていない。本稿では、このような新しい動きの中で作り出される宗教空間はいかなるものなのか、その社会的意味合いはどのように変容するのかを検討する。そして、対象を近代期の高野山に限定することで、現代の高野山に示唆するものとした。

Ⅲ. 調査結果

1. 明治維新と聖地高野山の再編

(1) 明治維新による聖地高野山²²⁾

明治維新の版籍奉還、廃藩置県、地租改正の一連の変革は、高野山の存立基盤に影響した。また、神仏分離政策による神仏の取り扱い等、太政官布告による様々な改革により、高野山も改革を余儀なくされる。ここに、高野山金剛峯寺は新政府によって再編されることとなった。

宗教制度については以下の再編がなされた。村上弘子(2018)によると1869(明治2)年、高野三派すなわち学侶・行人・聖の名目が廃止・統合され、寺院については、青巖寺と興山寺をひとつにして「金剛峯寺」を称することになった。そして、高野山寺領内の行政全般を扱う機関として金剛峯寺総宰庁が置かれ、高野山一山が金剛峯寺となり、高野山は堺県の管轄下に入った(のち五条県、和歌山県の管轄へと変更される)。金剛峯寺境内は、1952(昭和27)年に高野山国有境内地と立木が無償贈与されるまで官有地であった。

財政面に関しては、1871(明治4)年、全国一般寺社の領分を上知させる太政官布告により、金剛峯寺は、境内地以外の2万1000石の寺領を新政府に奉還した。そして、旧政府や各領主からの米金の寄付も廃止された。金剛峯寺としては、太政官布告により定められた諸寺院禄制が適用され、これまでの現収納高の2分5里が現石で下されることになった。その結果、江戸時代よりはるかに少ない5250石のみとなり、続く1873(明治6)年の太政官布告により、金剛峯寺所有の山林のうち、高野山内を除く山林4000町歩が返還されたことから一層の経済的困窮に陥った。

社会面では、1872(明治5)年、女人結界の制を解かれ、同年僧侶の肉食・妻帯・蓄髪の実行が認められた。そして、1873(明治6)年、僧位僧官の待遇は廃止され僧侶の特権は奪われた。このように金剛峯寺は、次々に変革を求められていった。

さらに、高野山では1877(明治10)年と1886(明治19)年の二度にわたり大規模な寺院合併が行われた。それは、「寺社の境内以外の寺領・山林をすべて上知する」とした太政官布告により経済的基盤に打撃を受けたことが遠因である。寺院合併により、廃寺が相次ぎ、離山僧も続出した。このような寺院の統廃合に拍車をかけたのが、二度の大火である。

維新当時は680余寺あったが、1884（明治17）年の大火により50寺が消失し、全体で431寺に減少した。1888（明治21）年には高野山上における大火により多くの寺院が消失し、1891（明治24）年には再興の見込みがない寺院を再統廃合した。その結果、金剛峯寺の他、別格本山11院、準別格本山63院、格院上等17院、格院中等13院、格院32院の合計137寺となり、寺院組織が確定した。

このように、高野山上では寺院の統廃合や大火による寺院の喪失が進む一方、女人禁制の解除や社会生活面の自由化、商工業者の増加等により、高野山上の景観や社会生活の様相が変化し始める。

（2）女人結界解禁と金剛峯寺

女人結界解禁（1872年）の布告は高野一山を震撼させた。女性の入山を厳格に禁止し千年に及ぶ聖地聖性を維持していた高野山で、女性の登山参詣が許可されることになったのからである。しかし、金剛峯寺は布告取り消しの嘆願書を提出した。加えて、山内では伝統的な山規²³⁾と呼ばれる一山成規細則による女性の宿泊や女性居住者の取り締まりがおこなわれた。

これについて中野は次のように述べている。

女人結界解禁による女性登山者は1879（明治12）年ころになるとかなり増加し、そのため、1879（明治12）年、金剛峯寺は本宗合同大成会議を東京で招集し、宗制の改革並びに山規の改正を議決した。この改正立法を本宗管長は内務卿松方正義に届け出、その庁許を得て山規改正を施行している。²⁴⁾

これは、「寺院には女性を止宿させないこと」、「女性を隠し置いたり、肉類を売ったり、食べたりするものを金剛峯寺教護所に報告させること」などを決議したものであり、庁許によって施行されている。このことから、金剛峯寺は公的な権力を背景にしながら独自の体制維持を計ろうとしていることが見て取れる。翌年に、山内71院の住職および同代理が山内同盟規約条款を制定している。この山内同盟規約条款は次の条文からもわかるように、山内の住職たちの一山の伝統を保持しようとする決意のほどがうかがえる。

山内同盟規約条款 1880（明治13）年1月付
 第一条 自今山内ノ衆徒誓テ菩提心ヲ発シ三地両所ノ加護ヲ受ケ一山興復ヲ祈願スヘキ事
 第二条 各寺院中ニ於テ婦女子ノ止宿ハ更ニ厳然ト制禁スヘキ事²⁵⁾

以後、女人の居住が許可されるまで、高野山の風紀を守るための「山務更正立法委員会」の結成や僧侶の他は高野山に戸籍を置くこと、女性が寄留することも不許可とすること

を和歌山県に出願し許可されたこと、高野山内護衛規則（高野山の山規を遵守させるための7か条）の作成など山内の変化に応じて対策が取られた。しかし、1881（明治14）年、根本大塔再建起工の法会に参詣する女性信者の宿泊が特別措置として認められた。そうせざるを得なかったほど女性参詣者・居住者が増加し、高野山規の違反が黙認しがたい状況に陥っていたことがわかる。しかも、高野山における規則が厳格化されたにもかかわらず、太政官布告によって僧侶の肉食・妻帯・蓄髪は認められていた。このように、高野山側の抵抗にもかかわらず、僧侶の聖職者として守るべき規則は有名無実化していた。

以上のように、金剛峯寺は、公的な権力を背景に高野山内の風紀を維持し、1000年以上続く伝統的な聖地・聖性の保持に努めたことが推察される。しかし、順次行われる法会、定期大法会等の参詣者の増加と、それに伴う山内での商工業者らの町家の発展に金剛峯寺は抗しきれず、1905（明治38）年に開創1100年記念大法会に向けて山上での女性居住を公認した。

これらの高野山の変化に対し、金剛峯寺（総宰庁や金剛峯寺教護所（寺院や町屋の取り締まりを行う））は寺院の存立と聖地・聖性の保持をはかるためどのような対応を行うか、さらには聖地空間において、政治権力による政策や戦略、そして民間の動きやその影響に対し、寺院やその地で生きる人々の抵抗や戦術がどのように展開して、聖地空間が再生産されていくのが重要となる。このように、政府の政策と社会情勢の変化に対し、聖地高野山は、新しい聖地のあり方を創造しなければならなかったのである。

2. 聖地高野山の観光地化

（1）近代国内観光の発達と高野山

聖地高野山が明治維新による改革の痛手を受け、そこからの脱出の道を模索していた頃、国による鉄道国有法の制定（1906年）により国家規模での交通網の開発・整備がなされていった。1920年代に入ると、私鉄資本による地方の鉄道敷設が進み、国内観光が脚光を浴びるようになった。このような状況において、聖地高野山はどのような眼差しを受けていたのだろうか。

まず、高野山への参詣・「お寺参り」についてみると、次のように団体旅行が実施されている。明治末期には、政府による交通網の整備が進むなか、日本初の企画旅行²⁶⁾が実施されている。それは、1905年に南新助が創業した日本旅行会によるもので、日本初の旅行あつ旋業として、高野山参拝と伊勢神宮参拝を企画実施した。南新助は、400人以上であれば国鉄の鉄道運賃が半額になることを知り、新聞のチラシを配布し、滋賀県大津や草津で募集した。これに対して約900人が応募し、高野山参拝、伊勢神宮参拝の企画旅行を実施した。このように高野山参拝は一つの募集型の企画旅行商品

として売買され、「宗教的なもの・参拝」の商品化が始まったと考えられる。

集団による高野山参拝は、鉄道網の整備によって促進されたのである。特に関西鉄道を中心とした紀和鉄道、南和鉄道、奈良鉄道の合併による鉄道網の接続・延伸により、1898（明治31）年、大阪から橋本までの奈良周りのルートが完成したことが集団による参詣につながった。以後、巡礼・参詣と鉄道の関係は深くなっていく。また、企画旅行商品としての参拝旅行が始まったことから、聖地と団体旅行を扱う旅行あっせん業者との関係も注目しなければならない。

次に、1924（大正13）年、旅行関係諸団体の中心的な機関である「日本旅行文化協会」が設立され、鉄道省は、『鉄道旅行案内』²⁷⁾を1921（大正10）年より順次刊行した。これには、巻頭で「本書は鐵道によって旅行せらるる人々の参考に供せんが為に、沿線主要の地に就て、遊覧地や遊覧旅行経路等を概説したものである」とあり、本文中では、「寺院」も取り上げられている。続いて、鉄道省は、1932（昭和7）年『お寺まゐり』を刊行し、各沿線の代表的な「お寺」を掲載した。

高野山は、『鉄道旅行案内』や『お寺まゐり』²⁸⁾に掲載されている。『鉄道旅行案内』には高野山への交通経路や料金、宿泊所、簡単な説明が記載されている。『お寺まゐり』には、高野山の歴史や建物、境内の案内や宿泊などに関する詳しい情報が記載されている。このように、『旅行案内』など観光案内の発行によって、より高野山に関心を向ける一つのきっかけになったものと考えられ、「鐵道によって旅行せらるる人々」の観光目的地の一つとして、高野山は注目されていく。

以上論じてきたように、大正時代になると国内観光が浸透し、「寺院」などの宗教施設が観光の対象とみなされる中で、高野山は遊覧旅行の目的である「お寺まゐり」の寺院として知られるようになった。このような状況において、高野山は開創以来続けられてきた伝統的な行事・大法会等を寺院経営の大きな力としていった。この点は、次にみていくことにする。

（2）金剛峯寺の定期大法会と鉄道敷設

① 大正・昭和期の定期大法会

明治維新は、金剛峯寺にどんな打撃を与えたのだろうか。政府が進めた改革は、経済基盤を喪失させ、社会秩序の混乱や景観の変化等により、聖地高野山の存立を危うくした。金剛峯寺の塔頭である宿坊寺院でも「目下一山各院困弊疲難之際ナレハ」²⁹⁾とあるように、経済的に困窮していたのである。そのため、聖地としての意義や信仰を保持し、寺院経営を堅調なものにすることは、高野山にとっては大きな課題となったことが推測される。明治維新による寺院の合併と大火による寺院や町屋の喪失など突然の聖地の衰退の中で、その課題を克服する糸口になったのが高野山開創以来続けられてきた伝統的な宗教行事、とりわけ50年に一度開催される定期大法会である。

松井によると、信者や参詣者にとって聖地は重要な場所であり、彼らはそれらのもつ神聖な雰囲気や非日常的な空間を味わうことを期待しているとしている³⁰⁾。とりわけ50年に一度の大法会は、聖なる感覚を呼び起こす契機となりうる宗教行事であり、各定期大法会は、高野山に驚くほどの参詣者を呼び込んだ。

定期大法会の主なものには（表1）、50年ごとに開催される弘法大師御遠忌大法会と高野山開創大法会がある。

年 代	各大法会
1884（明治17）年	弘法大師 1050 年御遠忌大法会
1915（大正4）年	高野山開創 1100 年大法会
1916（大正5）年	高野山開創 1100 年臨時大法会
1934（昭和9）年	弘法大師 1100 年御遠忌大法会
1934（昭和9）年	高野山金堂落慶大法会
1937（昭和12）年	高野山根本大塔落慶大法会

表1 明治から昭和前期における大法会（筆者作成）

高野山にとっては最上級の行事であり、想像を絶するほどの参詣者数を得た。1915（大正4）年の高野山開創 1100 年大法会は大盛況であったため、参加できない参詣者が続出した。そのため、異例ではあるが翌年臨時大法会が行われたほどであった。このような大法会の様子は次のようにあらわされている。

1915（大正4）年の開創 1100 年大法会は次のように報告されている。

三月三十一日登山者3千、四月一日に寺院宿泊のみが二千五百、高野山宿屋宿泊が五十、神谷宿泊4百、即日下山したのが約千人、外に外国人が五人、合計約6千九百五十人である。³¹⁾

1934（昭和9）年の1150 年御遠忌の様子は、以下のよう

に記載された。

「宿坊寺院四十五ヶ院全部と云つてよい程に皆建増しして御入来を待っている。」

「一畳に一人とすれば14000 人の人が宿泊でき、臨時雇いを増加して、各寺では30～40 人が立ち働いている。宿泊を見越して借り入れた布団が10000 枚であった。」

「幾萬の賽者を吞吐するケーブル終驛の混雑は言語に絶し、改設された驛の施設は徒らに狭隘を告げて賽者の不平を聞き、吐き出された群衆は驛前に出づれば女人堂行バス、大門行バスの兩社の呼び聲に迷ひ、群を離れて東西に分かれるあり、團長は途方に暮れるといふ有様……」³²⁾

各大法会開催については、5～10 年に及ぶ準備期間を設定し、檀信徒の寄付による記念事業が行われる。当時、そ

の事業として、金堂や根本大塔など壇上伽藍の堂塔再建や境内の道路整備、新しい施設の建設等、金剛峯寺境内の修復、再建が目的とされた。『大阪朝日新聞』1937（昭和12）年「高野山根本大塔再建」の記事によると、この様子は次のように描写されている。

この法要期間中の団参申込は大塔完成事務局團で受付けただけでザット十万人、この他一日二千人位と見て全国から十五万人の善男善女を迎えるわけで……。

さすがに商売人は抜目なく、大塔煎餅、大塔タオル、土鈴導き犬など御遠忌法要に見られなかったお土産その他を山の如く積んで待機している。

このように、修復再建された堂塔は、参詣者を運ぶ鉄道会社、参詣者を相手にする土産物業者と宿泊業を営む宿坊に活力をもたらし、「行って見るもの拝むもの」という新しい観光資源ともなったのである。

② 高野山上への鉄道敷設

高野山の伝統的宗教行事に大きく寄与したのは、大阪汐見橋から高野山上まで敷設された交通機関の近代化である。北尾良之助の観光案内『高野山』³³⁾には、次のような記述がある。

当時の乗り物といえば、馬、人力車、山駕籠などであったが、(中略)殊に椎出から高野山までの山中の山駕籠が約200挺も渡世していて其の賃金も明治初年ごろには、片道1円20銭、大正4年ごろには1円75銭となり、同じ7年ごろになると5円にはね上がり……登山者のための荷持、腰押など渡世とするものが大正4年頃まで、200名も数えられた。

これは、登山の大変さと登山困難者には多額の費用が掛かったことを示している。鉄道敷設が参詣登山を一変させ、信者や一般参詣者の参詣・観光を容易にしたことは明らかである。この高野山への鉄道敷設は、次のようであった。

1900年代(明治30年代)関西圏私鉄鉄道網が拡大する中、大阪から高野山への鉄道敷設が始まった。1896(明治29)年、高野鉄道株式会社は、大小路・狭山間を工事開始、1898(明治31)年に営業を開始した。1915(大正4)年に高野登山鉄道(高野鉄道から結成)は橋本までの延長工事を完成させ、大阪汐見橋から橋本間が開通した。その後鉄道会社の合併などの紆余曲折を経て、1929(昭和4)年、高野山電気鉄道(南海鉄道の子会社)は紀伊神谷～極楽橋間を開通させ、全線開通に至った。1930(昭和5)年には、高野山駅が設置され、極楽橋から高野山駅間のケーブルが開通した。これによって、大阪汐見橋から高野山山上までの所要時間は片道2時間余りに短縮された。また、南海鉄道株式会社が高野山にバス乗り入れを果たし、高野山駅から女

人堂までバスで移動できるようになった³⁴⁾。

こうして、参詣者の山岳霊場への登山は容易なものとなり、身体・年齢・時間を問わず、誰もが聖地・霊場にアクセスできるようになったのである。つまり、高野山は私鉄資本と連携することで幅広い層の参詣者を受け入れることとなり、高野山参詣の大衆化が進展していった。

鉄道敷設の効果は高野山上にもあらわれた。1890年代より、参詣者の増加等を背景に、金剛峯寺教議所は生活必需品などの小売業、飲食業、嗜好品販売業、宿泊業など多種目にわたる営業許可を出し、山内参道などには多くの商店が立ち並ぶようになった。このように、高野山上は、信仰と観光レジャーが混在する聖地ツーリズムの様相を呈した。そのような聖地の賑わいを受けて、南海鉄道株式会社のパンフレット『高野山案内』1930(昭和5)年には、次のように書かれている。

ケーブル開通 天下の霊場高野山へ楽に日帰り出来ます 昭和5年10月末日迄特別大割引 この切符で和歌山市に廻って帰れます 秋の高野山 登山の絶好季

これは高野山参詣の一大革命であり、多くの参詣者を山上に運んだ。当時、ケーブルカーは特に珍しく、昭和初期というかなり早い段階で敷設され、急勾配を登るケーブルカーとしては、長い距離を誇っていた。1934(昭和9)年の1100年御遠忌の際には南海鉄道の計らいで南海高野線に「美人ガイドを乗車せしめて沿線の説明にあたらしめ、ウラ若い少女はスマートな姿に美声を張り上げてガイドした。」³⁵⁾とあり名所案内を行なっている。男性社会であった高野山の名所案内を女性が行なうことで、南海鉄道は参詣者に「高野山観光」も強く印象付けようとした。

このように、高野山参詣は、今までの徒歩や山駕籠等による聖地への巡礼・参詣とは異なり、大正期の都市生活の合理化、機能化への指向という世相を反映していた。この時期に、高野山参拝は、モダンで、珍しく、便利な交通機関を用いた観光を伴う聖地ツーリズムに変化していったと考えられる。

ただし、北尾良之助³⁶⁾によると、開業時の乗降客数は期待はずれで予定していた半分にしか及ばなかった。それは、信仰心の厚い信者が修行にならないと感じ、ケーブルカーを避けたからである。しかし、その後急速に乗客は増加した。このように高野山・聖地への参詣は、都市からでも誰にとっても短時間で日帰り可能、近代的な乗り物を使ったモダンな観光というイメージがつくられていった。

③ 鉄道会社と金剛峯寺との協働

鉄道会社と金剛峯寺は互いにどんな関係のもとに存立しえたのだろうか。鉄道会社は乗降客を、高野山は参詣者を常により多く獲得することは互いにとって有益であり、両者が協働関係を樹立することによって、より一層の発展が両者にもたらさ

れることは自明のことであった。例えば、両者は図1など次のように協働関係を進めていった³⁷⁾。



図1 南海電車パンフレット（南海電鉄株式会社提供）
※「南海電車」は、南海鉄道（現在、南海電鉄株式会社）の呼称

1913（大正2）年 大正4年の高野山開創1100年大法会の旅客運搬のため、高野登山鉄道と和歌山水力電気株式会社が提携。高野登山鉄道は橋本から高野口まで延長。和歌山水力電気株式会社は高野口から推出間の鉄道敷設計画を立てる。

1935（昭和10）年、南海鉄道高野線では、スキーヤーを誘致するため、翌年2月まで運賃割引をする。（図2）

以上のように、大法会の開催の期日に合わせた鉄道敷設の延伸、両者による大法会の参詣者輸送計画の立案、宗教行事に合わせた臨時便の増発や乗車運賃の割引など協働関係が随所で生まれた。

それ以上に、両者が協働することによって利益を売るための共通の目標は何であったか。次にあげる両者の活動は興味深いものである。1916（大正5）年、金剛峯寺執事湯崎師が県庁に出向き、「山内の発展策」について次のように陳情している³⁸⁾。

大阪市には高野山に関係の講社団体五百余あり 即ちこれら大阪人本位の遊園地を山上に設け山内の道路を整理し一山の面目を全く改めて多数の登山者を誘わんとするにあり

この記事から、高野山の活況を背景に高野山の開発が金剛峯寺によって注目され始めたことが分かる。

次に、1921（大正10）年6月21日の大阪朝日新聞には「高野山上に大スケート場」の見出しで、和歌山水力電気株式会社及び高野大師鉄道株式会社（大阪高野鉄道と高野大師鉄道が共に、以後、南海鉄道と合併する）の共同事

業の一つとして「冬季に登山客を吸収すべき策として山上の平坦地に大池を設けてスケート場と為し運動の地とすべく決定した。」とあり、高野山の開発が多方面から注目されていたことが見て取れる。

その他、1931（昭和6）年、町家有志と所縁坊（宿坊寺院）の間で高野山スキー場計画が立てられた。候補地は中の橋の北方約1500坪の地域。スキー場建設には金剛峯寺と南海鉄道株式会社の全面協力があったことが記されている³⁹⁾。



図2 南海電車パンフレット、高野山スキー（南海電鉄株式会社提供）

そして、大阪朝日新聞、1932（昭和7年）12月9日付の見出しには、「アイスリンクも設ける計画 京阪神の権威者が集って 高野山スキー座談会」とあり、高野山は、スキー場としては素人向きで、雪質・大阪からの利便性は良好であるが、雪の量と降雪期間が問題である。この雪不足を補うため、アイスリンク設置を提案し、東武鉄道のアイスリンクを視察することが計画された。座談会参加者は、地元から高野山所縁坊代表、高野山陸会、大阪スキークラブ代表、南海電車本社運動部など三十余名と記載されている。

そして、1940（昭和15）年、南海鉄道株式会社は、金剛峯寺・和歌山県の許可を得て高野山にスケート場を新設した。ただこの年は、光明院の裏山平地に長さ40m 幅35mのスケートリンクの地ならしを行っただけであった⁴⁰⁾。

上記の記事からわかるように、高野山への鉄道敷設後、冬季集客のため高野山の自然環境を生かしたスキー、スケート

場の建設が金剛峯寺や南海鉄道株式会社などで立案、実行された。その結果、スキー場は、地域住民の若者、金剛峯寺、南海鉄道株式会社によって建設され運営され、スケート場については、この頃戦時体制へと進もうとしている社会情勢であり、スキー場は夏場、馬鈴薯、稗などを植える農地に使われ始めたことから、スケートリンクは使われることはなかった。

このように、高野山金剛峯寺は「一山の面目を全く改めて多数の登山者を誘わんとする」というように冬季集客を推進することや年間通して高野山上の集客を確保することを目指していた。そして、鉄道会社は大都市から近くて便利な夏冬の行楽地として高野山を売り出していくことを目的としていたが、高野山側とともに冬の行楽地開発という目標に向かって計画実行された。

そのような協働関係を保つ共通の目的は信仰の対象としての高野山だけでなく、自然、文化環境を生かした高野山上の活性化であった。

1934（昭和9）年、『高野山時報』年始号の「御遠忌後の高野山をいかにするか。」の記事の中で、大阪毎日新聞顧問木下東作氏の「高野山の将来私見」（『高野山時報』昭和9年1月5日）に代表される「今後の高野山像」が注目される。

天下の霊域としての高野山を、一、大師信仰の中心とし、宗教的に確立すること 二、名所として、遊覧地としての高野山存立を図ること 三、避暑地としての高野山の開発 四、スポーツ方面の発展、登山、スキー、スケートや夏の合宿練習のための練習場開設……先ずこんなものかと考えます。

このように、鉄道資本や新聞社などは、高野山は霊場・信仰の地であると同時に、豊かな自然の恵みも生かしたオールシーズン型のリゾート地としての高野山開発を念頭に置いていたと思われる。この頃出版された観光案内の『南海鉄道沿線大観』（1934年）には、次のように書かれている。

夏知らずの極楽境高野山は、盛夏の暑さを避ける絶好の避暑地で、避暑の地としてのあらゆる必要な条件の総てを具備していると云ってもよい。（中略）本当に居心地のよい極めて衛生的な酷暑の慰安地としては最も好適である。殊に塵埃と、喧騒の中に活動している都会の人達にとっては刺激の強い海辺よりも、静かな大自然に抱かれた山上こそこの上もなし理想的に感ずるであろう。

ここでは、日ごろの生活とは違う避暑地としての快適さやテニスコート、グラウンド等の設備など、リゾート環境が整っていることなども説明されている。交通機関の発展とともに、大阪という大都市に時間的距離的に近く自然環境も良いことから、近代都市大阪に住まう人々に憧れの避暑地・リゾート地のイメージをいだかせ、いかに高野山に惹きつけるかという狙いが

見て取れる。

これは、大阪を「塵埃」、「騒音」、「都会」の場所として表象する一方、それに対して、高野山は、「森閑とした心身の休養の地」として描き、大都市とは対照的な非日常空間であることを喚起することで、健康、休息、レジャーの地と表象し観光客の誘致を図ろうとしていたと思われる。

ここまで説明してきたように、高野山は、「仏教の一大聖地高野山」・「天下の霊場高野山」から日本の一大観光地へとイメージを大きく転換していった。この要因の一つに「近代的交通機関の発展」がある。鉄道会社は高野山のイメージの変化に大きな役割を果たした。そして、聖地へのアクセスを容易にし、乗降客＝参詣者をより多く獲得することを目論みただけでなく、金剛峯寺とともに聖地のあり方に一つの提案をし、一般の人々の聖地とのかかわり方にも少なからず影響を及ぼしたことになる。つまり、鉄道会社は、金剛峯寺との協働関係から、多種の要素を聖地高野山に付け加え聖地の編集を試みたのである。

3. 聖地の管理

(1) 山内景観の保持と観光関連施設の阻止

明治維新後の高野山の変化、特に観光化の中で、金剛峯寺はツーリズムにともなう山内の土地利用の変化に規制を設け、山内の景観と森厳性を保持する目的をもって下記の取り組みを行った。これは、金剛峯寺の聖地の管理の方策の一つであると思われる。松井は、「聖地の管理においては聖地の場所性というべき聖地を聖地ならしめている場所の精神を守ることが重要となる。」⁴¹⁾と述べており、金剛峯寺の聖地管理の取り組みは聖地の場所性を保つものであると考えられる。

(2) 山内土地整理事業

明治末期、金剛峯寺は山内土地整理事業を始める。これは、山内の景観と森厳性をいかに保持させるかという目的のもと、山内の土地利用に一定の規制を設けるというものであった。当時、維新の上知令によって寺院は一部境内を除いては官有地となり、山林は国有林となっていた。経済的に立ち行かなくなった寺院跡地の払い下げが行われ、民有地が一山境内地内に登録されると、商店、住宅など私有地が入り乱れる状態に立ち入った。そして、鉄道敷設による参詣者増加が顕著となり、寺院や参詣者を相手とする商店、民家、そして狭小な道路と境内を横断する小河川などが交錯した景観に陥った。このような観光地化の進展の中で加速する雑踏化に歯止めをかけ、金剛峯寺としての聖地保持を目指したものが山内土地整理事業である。この事業の主要計画は、風致上の問題を持つ歓楽街を山内中央の上ノ段から北辺に移転すること、山内主要道路の拡張に伴い町家や店舗の立ち退き・移転を進めること、高野町による上下水道施設の設置等であった。

金剛峯寺は、寺内に高野山境内整理課を置き、少数ではあるが町家住民も組織に参加した。そこで、日光東照宮大修繕工事主任技師等であった建築家大江新太郎は、山内を地理的に四区分することを提案し、彼の素案である四区域分割案—神聖区域（壇上伽藍・奥の院）、清厳区域（寺院）、清雅区域（住宅）、自由区域（商店等）—を基に、山内土地整理方針が決定された⁴²⁾。これは、大阪朝日新聞 1922（大正 11）年 9 月 16 日付に「高野山内の整理問題 円満に話を纏める方針」とあり、9 月 17 日付には「高野山の土地整理問題 県当局と協定成立 明年度より十年計画」と 2 日続けて掲載されている。9 月 20 日付けには「高野山土地整理と町家同士の会」、9 月 26 日「高野整理と経費」という見出しで連続して記事が掲載され、重要な問題として取り扱われている。

その結果、河川整備や道路拡張とともに民家や商店の移転が中心的な事業として実行された。上の段（現在の高野山大学敷地）に軒を連ねていた料亭や料理屋、芝居小屋、豆腐屋などが自由区域として新たに開発された鶯谷地区に移転させ、料理屋や劇場も新設された。しかし、莫大なる費用と困難な問題が噴出し山内整備事業を完成するまでには至らなかったが、おおむね実行された。

金剛峯寺はこの事業について、神社仏閣は神聖なる区域に存在するべきであり、周辺の環境や景観を整備して機能することが寺院の環境に望まれる重要な要素であるとし⁴³⁾、変化する聖地を聖地として保持する意志を明らかにしたものであると考えられる。これは現在の高野山の森厳性保持の素因ともなっており、現在の高野町域の景観を形作る基盤ともなっていたのである。

(3) 二度にわたるホテル建設の阻止

高野山に、ホテル建設計画が 2 度起こっている。最初は 1928（昭和 3）年である。それは、『高野山時報』1928（昭和 3）年 8 月 25 日に次のように記載されている。

「高野山上に 大ホテル建設されんとす」という見出しで、「高野山上に資本金五拾萬円を以てする一大ホテルを建設して旅館業を営もうとする願書が 7 月末に堺市梅鉢信三郎氏と高野山鶯谷許住民若干の連名でもって提出された。和歌山県当局は時代の必要上よりにて大體に於いてこれに許可の意向を有するものの……。」

この意向に対して、高野山の所縁坊（宿坊寺院）は、協議を重ね、和歌山県当局に陳情した。陳情理由として、高野山霊山の伝統的習慣を破壊し、山内をいよいよ俗化させる憂あるなど山規の実情をあげている。一方、一山代表 2 名、金剛峯寺代表 1 名が内務当局にも上京して陳情している。この出来事に関し、高野山では直ちに高野山境内整理評議委員会が開かれ、ホテル建設問題、山内自動車乗り入れ問題

が話し合われた。

翌年、ホテル建設問題について、高野山寺院町家懇談会が行われ、金剛峯寺は建設反対の立場をとり、続いて、毎日・朝日新聞に「ホテル建設絶対反対」広告を掲載した。この出来事は、極楽橋・高野山駅間のケーブル開通（1930 年）目前に起きたものであり、参詣者が増加する高野山において、営利目的のホテル建設とされ異議が唱えられた。このように多くの反対にあい、ホテル建設計画は消滅した。

同じく 1931（昭和 6）年 10 月 15 日の記事には、「高野山ホテル問題は先年問題となりし時 一山の反対にて遂に終息したりしが如かりしも、今回またまた再燃しつつありし處……」

とある。東京の子爵や大阪の財界人が発起人となって国際観光ホテル建設企画を立ち上げ、高野山当局とも交渉し、おおむね建設の承認を得ていた。しかし、所縁坊が反対の立場をとっていると記されている。このホテルについては、「鉄筋コンクリートの頗るモダン建築で高野山を宣伝する上に外人の来遊にも資する」、「時勢の状況も変じ来れる関係上 反対実働は可成至難なりとみられている」とも記載されていた⁴⁴⁾。この記事からは、旧来の宿泊施設である宿坊は存在するが、東京・大阪の要人から国際観光ホテル建設の要請があり、金剛峯寺としては建設目的や時勢の状況に応じて建設もやむなしという考えがあったことが窺われる。

記事の文面からすると、高野山における国際観光ホテル建設については、当時、政府による国際観光政策が背景にあったことが推測される。この国際観光ホテル建設について、1920 年代より、政府は、外貨獲得の有効な手段として外国人観光客を誘致する「国際観光政策」の重要性を認識していたことから、1930（昭和 5）年に鉄道省外局として「国際観光局」、「国際観光委員会」が設置された⁴⁵⁾。政策課題はホテルや観光地の関連施設にかかわる施設整備、外客の接遇など多方面にわたった。特に外客を受け入れるための「ホテルと道路の不完全」が日本における外客誘致上の二大欠点であるとして、宿泊施設整備の重要性が注目されていた。建設予定の国際観光ホテルは、都市ホテルとリゾートホテルに分類できた。リゾートホテルは、外客に避暑、休養、スポーツを提供する宿泊施設として機能するものとされていた。このような社会的背景のもと高野山の国際観光ホテルの建設が示されていたのではないかと考える。

しかしながら、所縁坊は、「ホテル建設反対声明書」、高野山一山寺院「請願書」を和歌山県当局に提出し、反対の意志を表明した。以下は「ホテル建設反対声明書」⁴⁶⁾の一節である。

今回高野山上ニ外国人観光客ヲ誘引スルヲ目的トスルホテル建設ノ議起ルヤ絶対防止ノ決議ヲナシ極力反対の狼火ヲ挙げ居候、其所以ハ高野山ハ世間ノ所謂風光明媚ノ景勝ヲ以テ人ヲ呼ブ観光遊覧地ト違ヒ、山其物ガーツノ理想ヲ有シ、修学・修

禪ノ場トシテ将タ又宗教的情操ヲ涵養スル霊地トシテ、弘法大師の開創シ玉ヒシ山ナリ……高野山上ニ外国流ノホテルヲ建設スルコトハ千百年ノ歴史ヲ有スル霊山トハ余ニモ不釣合ニシテ……

この請願書では、高野山は、風光明媚な景勝によって人を呼ぶ観光遊覧地とは違い、山そのものがわれらの理想であり、修学・修禪の場であり、宗教的情操を涵養する霊地であるため、国際観光ホテル建設にはふさわしくないと訴えられている。

高野山のホテル建設については、日本政府は、「国際観光ホテル」の建設を通じて国外からの観光客の増加をはかろうとしていた。この政府主導の外国人観光客の誘致に対し、金剛峯寺と所縁坊の間には見解の相違があり、所縁坊は、新ホテルは寺院経営上の大きな懸念材料となると考えていたことが推察される。そこで、聖地の森厳性、聖性を保持するという目的とともに、所縁坊が団結してホテル進出つまり外部からの資本の流入を阻み旧来の伝統を死守したのである。

(4) 高野山内における一般住宅地化の歯止め

金剛峯寺境内地は、1875（明治8）年、寺院の境内のうち、祭典、法要に必需の場所のみを新境内とし、その他は上知（地）を命じられ国有となった。居住については高野山山規による制限があったが、1906年に弘法大師開創1100年大法会を機に高野山山規が全廃され、性別職種を問わず、一般住民も高野山に戸籍を置くことが可能となった。そのため、高野山内の官有地払い下げについては、寺院と一般住民との間で払い下げ競争が激化した。最終的には、1932（昭和7）年に、金剛峯寺と粉河税務署長との協議により、山内の土地は寺院に払い下げられることが決定した⁴⁷⁾。これにより、高野山の一般住宅地化は収まっていき、山内土地整理事業の精神を引き継ぎ、山内の土地利用に一定の規制をかけられるようになった。

以上のように、金剛峯寺は、山内土地整理事業や山内における一般住宅地に歯止めをかけ、外部資本によるホテル建設を阻止することで山内の土地利用の変化に一定の規制をかけることで聖地の管理を行い、聖地としての場所性を高め聖性の保持を図った。

IV. 考察 一高野山の聖地変容の過程と要因、聖地管理について

本稿は和歌山県の近代期の高野山を事例とし聖地変容の変容と要因、聖地の管理について、聖地の宗教教団である金剛峯寺に注目して調査を行った。以下では、そこで得られた知見をまとめ、観光地化に伴う聖地変容の過程と聖性の保持の関係性についての考察を述べていきたい。

高野山は、開創以来長い歴史の中で、聖地として信仰・祈りの場、修行の場であった。しかし、近代期には、明治維新以後、二度の社会変動を経て高野山は変容していった。

最初は、明治維新に伴う変革であり、二度目は大正・昭和初期、鉄道会社と金剛峯寺との協働による高野山観光開発であった。その過程・メカニズムを次にまとめる。

まず、高野山は、明治維新後の新政府による政策により大きく再編された。土地に対する権利の喪失や寄進の禁止で財政困難に陥り、入山規制が緩和されたことから、祈りや修行の場としての厳粛で神聖な聖地高野山は万人に開かれた。社会生活面の自由化、商工業者の増加等によって高野山上の景観や社会生活の様相が変化し始め、山上での人々の生活は活発化していく。

次に、聖地変容に大きなインパクトを与えたのは、大正期から昭和初期における高野山への鉄道敷設である。これによって、高野山への参詣が活性化し、老若男女、信仰如何に関わらず、高野山参詣が可能となった。そして、鉄道というアクセス手段は、鉄道の沿線のみならず、広範囲な地域の人々に聖地への参詣を誘うことができ、加えて、利害を共有する鉄道会社と金剛峯寺は大法会をはじめとする宗教行事やイベント行事等を協働することで積極的に集客を図った。また、鉄道の敷設は乗客＝参詣者の確保以上に、参道の飲食店や土産物店などその関連業者に対しても大きな効果をもたらしたといえる。参詣者の著しい増加等を背景に、1890年代より、金剛峯寺教議所は、小売業、飲食業、嗜好品販売業、宿泊業など多種目にわたる営業許可を順次出すことで、山内参道には参詣者目当ての多くの商店が立ち並び商業活動は一層活発化した。このように、参詣者の聖地への登山は容易となり聖地参詣や伝統的な宗教行事、建造物は信仰の対象のみならず観光の目的となり商品化されていくと同時に、聖地は活性化されていった。その結果、参詣（信仰）と観光が混在するという様相を呈し、高野山参詣は「聖地への旅」という一面を持ち合わせていく。

昭和期にはいと、聖地の変容・高野山の観光地化は、もう一段階進む。鉄道会社と金剛峯寺の協働関係により、高野山を信仰の地としてだけでなく、自然・文化環境を豊かに持つ地として高野山上の活性化に取り組んだ。それは、宿坊という宿泊施設を活用し、夏季は避暑地として冬季はスキー・スケート場を備えたリゾート地としての観光開発であった。この観光開発の目的は、都会からの観光客の誘致を図り、「仏教の一大聖地高野山」・「天下の霊場高野山」に新たな一面、「リゾート」を添付し、聖地の編集を試みたことと同時に、鉄道会社や金剛峯寺が、人々の聖地への関わり方に変化をもたらしたことである。

しかし、高野山の観光地化は、聖地に大きな課題をもたらす。その課題とは何か。まちの中心地に形成されていく歓楽街の賑わいがあり、狭小な道路は、参詣者やその参詣者を運ぶ人力車そして地域の人々で混雑化した。まして参詣者を目当てにした新しい出店や道路にせり出す商店の看板等の交錯した景観が境内地に広がり、密教の奥義を伝えてきた聖地

ならではの荘厳で謎めいた雰囲気や漂う宗教空間に取って代わろうとしていた。それによって、聖地の森厳性と高い精神性がかき消されようとしていたのである。これは、聖地の価値を失っていくという問題につながっていく。

金剛峯寺は高野山の変化に歯止めをかける方策として、以下のことを行った。山内の土地利用に一定の規制を掛けることとそれにまつわる外部からの資本の導入を阻止することであった。具体的には山内の土地整理事業の実施であり、二度のホテル建設計画を阻止すること、一般住宅地化への歯止めかけることという金剛峯寺の境内地における土地利用を管理することであった。山内土地整理事業では、神社仏閣は神聖なる区域に存在するべきであり、周辺の環境や景観を整備して機能することが寺院の環境に望まれる重要な要素であるという理念をもって実施された。また、二度目の国際観光ホテル建設計画について金剛峯寺は同意していたが、宿坊を経営する寺院・所縁坊の反対により計画は頓挫した。所縁坊は、「山そのものがわれらのひとつの理想であり、修学・修禅の場であり、宗教的情操を涵養する霊地である。」し、場所、精神の重要性を訴えた。松井は、「聖地の管理においては聖地の場所性というべき聖地を聖地ならしめている場所の精神を守ることが重要となる。」「聖地管理の問題は、空間的にも時間的にも大きなスパンでとらえる必要があり、景観の維持、観光客、地元住民との関わりをふくめて複合的に見ていく必要がある。」⁴⁸⁾と述べている。このように、金剛峯寺による聖地管理の取り組みは景観の維持をはかり、聖地の場所性（聖地ならしめている場所の精神を守ること）を追求したものであったのである。

V. おわりに

現代の観光地化に伴う聖地空間の変容という問題は、ツーリズムや地域の活性化と宗教との結びつきという課題と大きくかかわっている。そして、それに伴う聖地の聖性をいかに保持するかという聖地管理は、ツーリズムの影響が大きい現代の聖地において、解決しなければならない課題のひとつである。これらの課題について、近代期の高野山における金剛峯寺の姿勢に課題解決への手掛かりを求めた。

本稿で示したように、明治末期から昭和初期の高野山では、女人結界の解禁による高野山参詣の開放や鉄道敷設や観光開発が進み、宗教目的以外の訪問者も増加し、制度の変化や観光振興の中で、聖地の聖性が保持されるのかという課題に直面した。そのため、金剛峯寺はその課題に取り組み、聖性の保持に努めたという経験を持つ。それは、金剛峯寺が高野山内の土地利用の変化と外部からの観光資本の流入について、一定の規制をかける姿勢を示し取り組んだことである。このように一山境内地であり、聖地ならしめている場所の精神を守るといふ聖地の場所性を探究する金剛峯寺の課題解決への姿勢や方策は、世界文化遺産登録後、著しい外国人観

光客の増加を見せる高野山において一つの指針となり、大きな可能性を持つのではないかと考えられる。

この論文は、2015 年度和歌山大学観光学研究科修士論文「高野山における宿坊の変容と観光」の一部を加筆修正したものである。

註

- 1) 竹中宏子「キリスト教巡礼におけるホスピタリティの現在—サンティアゴ巡礼の巡礼宿とオスピタレロに着目した人類学的研究—」『観光学評論』3 巻 1 号、2015 年、17-33
- 2) 山中弘「概説 作られる聖地・蘇る聖地 —現代聖地の理解を目指して」『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂 星野英紀、山中弘、岡本亮輔編、2012 年、1-11 頁
- 3) 池田拓郎「長崎における聖地ツーリズムに関する研究」長崎国際大学大学院人間社会学研究科博士学位論文 2018 年
- 4) 門田岳久（研究代表者）「有料化する聖地・宗教空間の経済的ゾーニングと公共的管理に関する観光学的研究」科研 2017 年度実施報告書
- 5) 2004 年より、外国人観光客が急増している。明山文代「高野山における宿坊の変容と観光」2015 年度和歌山大学観光学研究科修士論文、2015 年 14 頁
- 6) 山中 弘『宗教とツーリズム —聖なるものの変容と持続—』世界思想社 山中弘編 2012 年、58-81 頁
- 7) 鈴木正崇「祭祀伝承の正当性—岩手県宮古市の事例から」『法学研究』77 巻 1 号、2004 年 185 - 235 頁
- 8) 今野泰三「パレスチナ・イスラエル紛争における宗教と政治に関する地理学的研究の動向」『人文地理』68 巻 2 号、2016 年、173-194 頁
- 9) 藤村健一「近年の英語圏における宗教の地理学的研究の動向—L'コンと R. W・スタンプを中心として—」『立命館地理学』16 巻、2004 年、71-80 頁
- 10) 森 正人「近代における空間の編成と四国遍路の変容—両大戦間期を中心に—」『人文地理』54 巻 6 号、2002 年、535-556 頁
- 11) 藤村健一「宗教施設と社会集団との相互関係とその変化—福井県嶺北の寺院・道場の事例から—」『地理学評論』78 巻 6 号、2005 年、369-386 頁
- 12) 松井圭介「観光戦略としてのキリシタン —宗教とツーリズムの相克—」『人文地理学研究』30 巻、2006 年、147-179 頁
- 13) 森 悟朗「『湘南』の誕生と江の島の変容」『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』山中弘編、世界思想社、2012 年、58-81 頁
- 14) 對馬路人「鉄道と霊場—宗教コーディネーターとしての関西私鉄」『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続—』山中弘編、世界思想社、2012 年 58-81 頁
- 15) 松井圭介「ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題：Shackly, M : Managing sacred sites を手がかりとして」『人文地理学研究』、2005 年、29 巻、159-169 頁
- 16) 松長有慶『高野山』岩波書店 2014 年
- 17) 高野山インサイドガイド制作委員会『高野山 インサイドガイド 高野山を知る 108 のキーワード』講談社、2015 年
- 18) 『性霊集補決闕抄』九巻に残されている朝廷に提出した上表
- 19) 松長有慶『高野山』岩波書店 2014 年
- 20) 明山文代「高野山における宿坊の変容と観光」2015 年度和歌山大学観光学研究科修士論文、2015 年
- 21) 池田一城「聖地の観光化とマスツーリズム —高野山における交

- 通の発達に伴う聖地空間の再編と役割の変化』『観光研究』26巻、2015年、61-72頁
- 22) 明治維新による高野山の改革についての記述は、松長有慶『高野山』岩波書店 2014年 宮坂宥勝、佐藤任『新版高野山史』心交社 1984年、高野町史編纂委員会『高野町史』高野町 2014年、中野三郎「結界解禁と高野山の変貌」『立正大学文学部論叢』15巻、1962年、安藤精一「高野山の寺内町」和歌山大学経済学部『経済理論 1968』和歌山大学経済学会 1968年、
- 23) 山規とは高野山独自の規則で僧だけでなく、一般住民・参詣者など山上総ての人々が護るべきものとされた。
- 24) 中野三郎「結界解禁と高野山の変貌」『立正大学文学部論叢』15巻、1962年、18-42
山規とは高野山独自の規則で僧だけでなく、一般住民・参詣者など山上総ての人々が護るべきものとされた。
- 25) 中野三郎「結界解禁と高野山の変貌」『立正大学文学部論叢』15巻、1962年、18-42
- 26) 日本旅行百年史編纂室『日本旅行百年史』日本旅行株式会社 2006年
1905年、南新助が旅行あっせん業である日本旅行会を創業し、高野山参拝、伊勢神宮参拝を企画、実行した。この時点で日本初の企画旅行と旅行業の誕生となった。
- 27) 1923（大正13）年刊行、142～143頁に記載。
運賃、直営宿泊施設、各駅の解説、乗り換え案内、おすすめの遊覧コースなどを紹介している
- 28) 1932（昭和7）年刊行 522～532頁に記載。
- 29) 高野町史編纂室『高野町史』高野町史料 625-626頁
- 30) 松井圭介「ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題：Shackly,M : Managing sacred sites を手がかりとして」『人文地理学研究』29巻、2005年、159-169頁
- 31) 高野山時報社『高野山時報』高野山開創1100年記念號
- 32) 高野山時報社『高野山時報』1934年
- 33) 北尾良之助『高野山』高野山出版社 1953年
- 34) 南海電気鉄道編『南海電気鉄道百年史』南海電気鉄道株式会社、1985年
- 35) 高野山時報社『高野山時報』1934年
- 36) 北尾良之助『高野山』高野山出版社 1953年
- 37) 高野町史編纂室『高野町史』高野町史近現代年表
- 38) 高野山時報社『高野山時報』1916（大正5）年
- 39) 梶井正夫『おじいさんの思い出話』（1996年1月26日）参照。梶井正夫ら当時若者たちが集りスキー場設立を相談した。そこで金剛峯寺には設立場所を、南海鉄道株式会社には、総ての宣伝と広告をとるように、全面協力を得、1931年（昭和6）2月11日に高野山スキー場が開設された。毎年2月11日には定期的にスキー祭りを開催するほどであった。（その後、第二次世界大戦のため中止される。）
- 40) 高野町史編纂室『高野町史』高野町史近現代年表
- 41) 松井圭介「ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題：Shackly,M : Managing sacred sites を手がかりとして」『人文地理学研究』29巻、2005年、159-169頁
- 42) 霊宝館『霊宝館だより』85号、2007年
- 43) 前掲42) 11頁
- 44) 高野山時報社『高野山時報』1931年
- 45) 砂本文彦「1930年代の国際観光政策により建設された“国際観光ホテル”について」
ON” KOKUSAI KANKO HOTEL “CONSTRUCTED IN THE POLICY OF TOURIST INDUSTRY DURING 1930S『日本建築学会計画系論文集』510号、1998年、235-242頁
- 46) 高野町史編纂室『高野町史』史料176
- 47) 高野町史編纂室『高野町史』高野町史近現代年表
- 48) 松井圭介「ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題：Shackly,M : Managing sacred sites を手がかりとして」『人文地理学研究』29巻、2005年、159-169頁

受理日 2019年11月18日